

体育原理

編集 高橋徹

Principles of physical education

見本

もくじ

はじめに

第1章 体育学と体育原理

1	体育学の全体像	11	
1	1 体育学の捉え方	11	
2	2 体育学の実態と研究対象	13	
3	3 体育学が抱える課題	14	
2	2 体育原理とはどのような分野か	15	
1	1 「体育原理」という言葉に対する認識	15	
2	2 体育学における体育原理の役割	16	
3	3 体育原理を学ぶことの必要性	18	
column		なぜ学校で体育の授業が行われているのか？ —体育は子どもたちをどうしたいのか—	23

第2章 体育学の全体像

1	1 人文科学系分野の概要	25
1	1 人文科学系分野の主な領域	25
2	2 研究テーマの一例	26
2	2 社会科学系分野の概要	27
1	1 社会科学系分野の主な領域	27
2	2 研究テーマの一例	28
3	3 自然科学系分野の概要	29
1	1 自然科学系分野の主な領域	29
2	2 研究テーマの一例	30
4	4 体育方法分野の概要	31
1	1 体育方法分野の主な領域	31
2	2 研究テーマの一例	32
5	5 保健科教育・体育科教育分野の概要	33
1	1 保健科教育・体育科教育分野の主な領域	33
2	2 研究テーマの一例	34

見本

6	アダプテッド・スポーツ科学分野の概要	35
1	アダプテッド・スポーツ科学分野の主な領域	35
2	研究テーマの一例	36
column	木もみて森もみる視野をもつこと	39

第3章 体育の定義とスポーツの定義

1	狭い意味での体育	41
1	「体育」の考え方	41
2	生きるために必要な体育（実存的体育）	42
3	時代や文化によって異なる体育（制度体育）	42
4	それぞれの教育現場における体育（体育実践）	43
2	広い意味での体育	44
1	「体育学」のはなし	44
2	「体育 Taiiku」の内容とは	45
3	「体育 Taiiku」がめざすもの	47
3	スポーツの定義	48
1	スポーツの定義を考える	48
2	『ホモ・ルーデンス』、および『遊びと人間』	51
3	まとめにかえて	52
column	英語で読むスポーツ	55

第4章 体育教師の立脚点

1	専門職としての体育教師	57
1	体育教師という存在を際立たせる	57
2	体育教師の独自性を炙り出す	59
2	体育教師の存在意義を問うために	61
1	教育者としての体育教師	61
2	教育という営みから学ぶ	64
column	他者・人生・教育に対する雑感	69

第5章 身体教育の萌芽

1	古代ギリシアにおける身体教育	71
1	古代ギリシアにおけるアゴン（競争）文化	71
2	教育（パイディア）の理想像としてのカロカガティア	72
3	身体教育的な営みとしてのギュムナステイケー	72

見本

2 古代ローマにおける身体教育	73
1 古代ローマにおける教育	73
2 古代ローマにおけるスポーツのショー化	74
3 古代ローマにおける身体教育の軽視?	74
3 中世ヨーロッパにおける身体教育	75
1 騎士の誕生	75
2 騎士の身体訓練	76
3 「中世暗黒史観」の再考	76
column メルクリアリスによるギムナスティケーの復興	79

第6章 教育思想に現れた体育の姿

1 近代体育につながる思想の出現	81
1 ギリシア的体育への関心	81
2 ルソンの体育思想	82
2 近代体育のはじまり	83
1 ドイツにおける体育のはじまり	83
3 近代体育の発展	87
1 スポーツ教育のはじまり	87
2 アメリカにおける「新体育」運動	88
column 近代オリンピックの父クーベルタンの思想に学ぶ	91

第7章 日本における学校体育の変遷

1 身体教育	93
1 近代教育制度の創始と普通体操	93
2 教育勅語と兵式体操	93
3 体操科から体錬科へ	94
2 身体運動による教育	95
1 経験を重視する体育	95
2 系統を重視する体育	97
3 身体運動の教育	98
1 権利や目的としてのスポーツ	98
2 生涯スポーツ志向の体育	99
4 現代の学校体育と体育原理	100
1 現代の教育改革と体育	100
2 危機に抗するための体育原理の課題	101

見本

column 学習指導要領と体育教師 103

第8章 体育が対象としてきた身体の諸相

1 身体観：「身体の捉え方」という視点.....	105
1 多様なイメージと多義性.....	105
2 身体はどのように捉えられるのか？.....	106
2 体育が求めた身体の移り変わり.....	108
1 兵士の身体：強さへの需要.....	108
2 スポーツする身体：強さと巧みさの融合.....	109
3 体ほぐしの身体：自己と他者への気づき.....	110
3 体育における身体のこれまでとこれから.....	112
1 体育における身体の諸相.....	112
2 デジタル時代に身体は不要か？.....	113
column 体育教師の身体も考える.....	116

第9章 教養教育と体育：大学体育から考える

1 大学体育とは何か？.....	119
1 大学体育の歴史.....	119
2 大学体育の多様な展開.....	121
2 どのような大学体育がふさわしいか？.....	122
1 小中高等学校とは異なる大学体育.....	122
2 受講生も授業運営に参画する大学体育：実技におけるゲームの創造.....	123
3 研究と関連づいた大学体育：講義における学際的实践.....	124
3 教養教育としての体育.....	125
1 教養、教養教育とは何か.....	125
2 本来の意味での教養教育としての大学体育.....	126
3 教養教育としての体育：まとめと今後の課題.....	127
column 「ありのまま」を肯定できる体育へ：「体育の負の側面」を忘れない.....	130

第10章 あそびと体育との接点

1 あそびとは何か？.....	133
1 体育は、なぜあそびに着目したのか.....	133
2 あそびの定義.....	134
3 あそびの分類.....	137

見本

2 あそぶという行為	139
1 いつからあそべるようになるのか	139
2 他者関係としてのあそび	141
column なぜ学校で体育の授業が行われているのか？ 一球技はなぜ行われているのか	145

第11章 運動学習と体育との関係

1 体育では何を育てようとしているのか	147
1 「動けるからだ」をもつために	147
2 運動の楽しさは「できる」ことにある	148
3 実践的な運動理論による運動学習	149
4 運動中の自分の感覚を指導に生かすこと	152
2 これからの体育における運動学習の指導者に求められるもの	154
1 指導者の中核的役割	154
2 学習者を共感的に捉える	155
3 どのように運動を覚えていくのか	155
4 体育における運動学習のこれから	157
column なぜ学校で体育の授業が行われているのか？ 一個人種目はなぜ行われているのか	160

第12章 スポーツ教育の視点から考える体育

1 「スポーツ教育」という概念	163
1 スポーツ教育とは何か	163
2 日本における「スポーツ教育」台頭の背景	164
3 スポーツ教育に関する展開	165
4 教科におけるスポーツ教育のさまざまな主張	166
2 シーデントトップのスポーツ教育モデルから見る体育	168
1 「プレイ教育としての体育」とスポーツ教育	168
2 スポーツ教育モデルの概要	169
3 スポーツ教育モデルから得られる示唆	170
column なぜ学校で体育の授業が行われているのか？	173

第13章 身体文化教育の視点から考える体育

1 武道の歴史と文化	175
1 武道の成り立ち	175
2 武道と教育機関	176

見本

2 現代の体育授業における武道の取り扱い	178
1 「武道必修化」の背景	178
2 学習指導要領にみる武道の文化	179
3 身体文化の教育	181
1 身体文化と身体技法	181
2 身体文化を教育することの意義	182
column 体育授業における柔道の面白さを再考する	185

第14章 表現運動と体育との関係

1 ダンスとは何か	187
1 ダンス教育が抱える問題	187
2 人類とともにあったダンス	188
2 学校教育におけるダンスの位置づけ	189
1 ダンス教育の歴史的変遷	189
2 創造的な学習（表現系・リズム系ダンス）	192
3 文化の伝承の学習（フォークダンス）	193
4 ダンス学習の意義（過去・現在・未来）	194
column 人と人をつなぐダンスの力を活用した事例「ぼうさいPiPit! ダンス」	197

第15章 体育原理のこれまでとこれから

1 学問領域としての体育原理の誕生と消失	199
1 体育原理専門分科会の発足	199
2 体育原理研究会	200
3 体育原理専門分科会から体育哲学専門分科会へ	201
2 “Principles of Physical Education”と「体育原理」	201
1 “Principles of Physical Education”	201
2 「体育原理」	203
3 日本の「体育原理」における“Principles of Physical Education”	204
3 体育原理の課題と展望：「体育」の「原理」をいかに構想するか	205
1 日本における体育原理の消失を考える	205
2 日本の体育原理のこれから：「原理」の概念を考える	206
3 日本の体育原理のこれから：「体育」の概念を考える	206
column なぜ日本の「体育原理」は消失したのか	211

索引	212
----	-----

第1章 見本 体育学と体育原理



なぜこの章を学ぶのですか？

体育原理は体育学を学んでいく上での入り口にあたります。したがって、体育原理の概要を知っておくことは、体育学についての学習を進めていく際にも大いに役立ちます。この章では、体育原理、さらには体育学を学んでいく上での基礎知識を身につけてください。



第1章の学びのポイントは何ですか？

体育学がどのような学問なのかについて、その全体像を把握した上で、体育原理という領域の概要と役割についても理解しましょう。さらに、体育学、および体育原理のそれぞれが抱えている課題についても把握してほしいと思います。



考えてみよう

1

「体育学」という言葉を聞いて、どのような研究を進める学問を想像しますか？ 思いついたイメージをいくつか挙げてみましょう。

2

学校で体育の授業が行われている理由について考えてみましょう。

見1本

体育学の全体像

体育学という学問は、教育学の各領域だけでなく、人文科学・自然科学・社会科学といった多様な分野からのアプローチによって研究が進められている。そこで主な研究対象とされているのは体育・スポーツ・身体活動である。体育学は誕生以来大きく発展を遂げてきたが、その背後には、研究対象・研究目的・研究方法が分化の一途を辿っているという問題と、研究成果を一つに取りまとめるための統合という課題を抱えている。

1 体育学の捉え方

体育に関連する学問は「**体育学**」と呼ばれてきた。しかし、「**体育・スポーツ科学**」や「**スポーツ科学**」、「**身体教育学**」といった別称で表現されることも多く、その名称をひとつに限定することは難しい*1。この名称の多様さこそが、体育に関連する学問の範囲の広さを表しているともいえる。

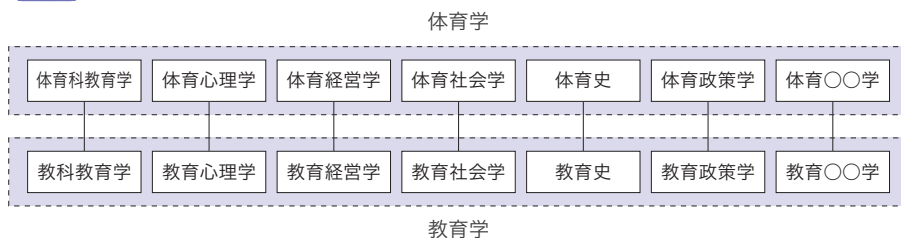
体育原理に関する議論に入る前に、まずは「**体育学**」という学問の全体像について紹介したい。特に、ここでは「**教育学の中の体育学**」と「**スポーツ現象を対象とするスポーツ科学**」という2つの視座を参考にしながら¹⁾、その姿を捉えてみたい。

(1) 「教育学の中の体育学」という考え方

体育と教育という2つの言葉の関係を考えるときに、体育は教育に内包されているため、教育の中の一つの領域であるという捉え方がある。そして、体育が教育のカテゴリーに内包されているという認識に立つならば、体育学も教育学の構造を援用していると考えることができる。これが、「**教育学の中の体育学**」という考え方である。

図1-1を見ると、体育学の各領域を支える土台として、教育学の各領域が

図1-1 教育学の中の体育学の構造



*1 ここには「**体育学**」と「**スポーツ**」という2つのキーワードが登場するが、この2つの言葉の違いを理解することも体育についての学びを深めていく上で非常に重要なポイントとなる。これらの違いについては第3章で取り上げているので、詳しくはそちらを確認してほしい。

出典 友添秀則「スポーツ科学のこれまでとこれから」『現代スポーツ評論』第34巻 創文企画 2016年 p.13をもとに筆者改変

見本

識の獲得を放棄するという意味ではない。むしろ、上に述べたような原理論的問題との対峙や、批判的思考力の向上のためには、何よりもまず体育を語る上での知識の修得がめざされる必要がある。例えば、体育学において使用される用語を正確に理解することなしに、体育学についての学びを円滑に進めることはできない。また、体育に関する歴史や思想を学び、現在に至るまでの体育の存立理由を知らなければ、現在の体育を批判することなど不可能である。したがって、体育原理の授業は、体育学の世界が長年の研究を通して蓄積してきた知識の中から、体育学についての学びを始めるにあたり最低限必要になる基礎知識を教授するという役割も担っている

(2) 体育原理を学んだ先に

授業としての体育原理の役割について4点紹介したが、これは授業を通して受講生に提示される4つの課題でもある。しかし、授業の中だけでそれら4つの課題の全てを達成することは簡単ではない。例えば、体育学の全体像を理解することは容易ではないし、原理論的問題への答えも一朝一夕では導き出せない。また、批判的思考力の向上や知識の獲得に至っては、長い年月をかけた日々の自己研鑽によってしか身につけることができない。したがって、授業としての体育原理というのは、4つの課題を探求するための入り口に位置づいているに過ぎない。

だがこの先、授業の枠組みを超えて体育原理を追求し続けるのであれば、自分自身の力で体育に関する原理論的問題を設定し、熟考の先にその解を見つけ出すことができる。また、体育の授業への利用・活用の見地から自ら体育学の研究成果をリサーチし、成果を取りまとめるという課題にも挑戦することができる。このように体育原理の授業をきっかけにして、体育の理論的世界との新たな出会いを経験することにより、その先にある体育に対する主体的な考察を始めることができるのである。

引用文献

- 1) 友添秀則「スポーツ科学のこれまでとこれから」『現代スポーツ評論』第34巻 創文企画 2016年 pp.12-14
- 2) 同上書 pp.12-14
- 3) 林洋輔『体育の学とはなにか』道和書院 2023年 p.26
- 4) 同上書 p.21
- 5) 片岡暁夫(研究代表者)「体育学の分化と統合に関する体育原理的検討」1995-1996年度科学研究費補助金(一般研究C) 課題番号:07680089
<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-07680089/>
- 6) 高島平三郎『體育原理』育英舎 1904年
- 7) 深澤浩洋「体育原理はどのような学問か」友添秀則他編著『教養としての体育原理[新版]—現代の体育・スポーツを考えるために—』大修館書店 2016年 p.8
- 8) 同上書

見本

- 9) 佐藤臣彦「体育哲学の可能性：形式的小および内容的アプローチ」『体育原理研究』第24巻 日本体育学会体育原理専門分科会 1993年 p.69
- 10) 同上書
- 11) 前掲書7) p.9
- 12) 佐藤臣彦「体育原理の批判的検討：スポーツ哲学への予備的作業」『体育・スポーツ哲学研究』第2巻 日本体育・スポーツ哲学会 1980年 p.43
- 12) 佐藤臣彦「体育哲学の課題」『体育・スポーツ哲学研究』第28巻第1号 日本体育・スポーツ哲学会 2006年 pp.7-9
- 13) 樋口聡「体育原理とはどのような学問か」友添秀則他編著『教養としての体育原理—現代の体育・スポーツを考えるために—』大修館書店 2005年 p.14

参考文献

- ・阿部吾郎『体育哲学—プロトレプティコス—』不昧堂出版 2018年
- ・久保正秋『体育・スポーツの哲学的見方』東海大学出版会 2010年
- ・近藤良享『スポーツ倫理』不昧堂出版 2012年
- ・前川峯雄『現代保健体育学体系 体育原理』大修館書店 1970年
- ・中村敏雄・高橋健夫編著『体育原理講義』大修館書店 1987年
- ・佐藤臣彦『身体教育を哲学する』北樹出版 1993年
- ・高橋徹編著『はじめて学ぶ体育・スポーツ哲学』みらい 2018年
- ・高橋徹・松宮智生・森田啓「『体育原理』で取り扱う授業内容の検討」『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第179号 岡山大学大学院教育学研究科 2022年
- ・友添秀則・岡出美則編著『教養としての体育原理 [新版] —現代の体育・スポーツを考えるために—』大修館書店 2016年

見本

学びの確認

①体育学が学際的な総合科学であると言われている理由について説明してみましょう。

.....

.....

.....

②「体育学の分化と統合」と呼ばれている問題について、要点を説明してみましょう。

.....

.....

.....

③「体育原理」という領域名称が「体育哲学」へと変更された理由について説明してみましょう。

.....

.....

.....

④体育原理の授業を通して提示される4つの課題を全て挙げてみましょう。

.....

.....

.....

なぜ学校で体育の授業が行われているのか？ — 体育は子どもたちをどうしたいのか —

長崎国際大学 / 神野周太郎

■ 体育授業がめざすもの

保健体育科の教師をめざして学び始めたばかりの学生に「体育の目的は？ 子どもたちに何を学ばせる科目？」と質問すると、返ってくる定番の回答がある。例えば、「集団（的）行動を通じた協調することの大切さ」「運動やスポーツをする楽しさ」「運動に必要な技術技能の獲得」「体力向上」といったものだ。さらに突っ込んだ質問をしてみる。「なぜ協調することが大切？」「なぜ楽しさを感じてほしいの？」「なぜ技術や体力は必要なの？」。そうすると、学生は頭を抱え、回答に時間を要する姿をみせる。あなたはどんな回答を用意するだろうか。

学生が質問に対して回答してくれた内容は、「体育が子どもたちにもたらすことができる結果」と捉えられる。そう考えると、学生が出してくれた回答は的外れではない。そして、もっとよい回答が用意できるようになるはずだ。そう、体育教師は、教育対象である子どもたちを思い浮かべながら「なぜ学校で体育授業が行われているのか？」を問い続けなくてはならない。なぜなら、子どもたち一人一人は多様な人間で、彼らが生きる時代や社会は常に変化の過程だからだ。本コラムのタイトルは、体育教師をめざすあなたへの問いかけそのものである。

■ 戦後に再出発した体育

これまで、体育は子どもたちをどうしようとしてきたのか。今回は戦後（いわゆる第二次世界大戦後）まで遡り体育を振り返ってみる。もっとも、体育の歴史は本書の第7章でさらに丁寧に解説されているので、ぜひともご参照いただきたい。歴史学習は今とこれからを語る上で欠かせない作業なのだから。

戦時中の体育がめざしたのは、敵となる諸外国に勝つための戦力としての国民（臣民）の育成だった（正確には体育授業の枠で軍事教練を行っていた）。

当時は武器の使い方を始め、あらゆる身体的訓練が実施された。文字通り「**身体**の教育」である。

周知の通り、敗戦国となった日本はGHQ等の指導の下、政治や教育などあらゆる考え方やシステムを根底から作り直すことを求められた。この時点から再出発を図った体育を「**新体育**」と表現したりする。

新体育では、「**身体**の教育」から「**身体活動**を通じた教育」へ、教材は「**体操**」から「**運動遊び**や**スポーツ**」へ、学習方法は「**一斉指導**」から「**問題解決学習**」へ。体育は子どもの体を鍛えることだけではなく、運動を通して彼らの心身の発育発達を促すことを担うこと、「**民主的な人間の形成**」がめざされた。以降、このキーワードを基に、体育は試行錯誤を繰り返す道を歩み始める。

■ 時代的・社会的要請を引き受ける体育の未来

戦後に再出発を図った体育は、今日まで時代や社会の影響下でそのあり方を模索してきた。例えば、生活の便利化が進むに伴い生じる青少年の体力低下現象があれば、体育は「**体力づくり**を重視した目標」の設定を求められた。「**運動による教育**」である。さらに、社会が工業化から脱工業化を図る頃には、人々の生活の中に**余暇**という考え方が広まり、運動は健康だけでなく生涯の楽しみという認識が浸透する。体育は**楽しさ**を重視し「**運動**や**スポーツ**それ自体の価値を学ぶための「**運動・スポーツの教育**」としての役割を担うことになった。

さて、改めて考えたい。今の体育は、何をめざしているのだろうか。子どもたちをどうしたい（すべきなの）だろう。そして、これからの体育はどんな方向へと舵を切っていく（べきなの）だろうか？ このことは、誰かが指示するものではなく、**民主的に**私たち一人一人が向き合わなくてはいけない大切な問いなのである。